

国 史 跡

楠 木 城 跡

千早赤阪村埋蔵文化財調査報告書 第5輯

2 0 0 8 . 3

千早赤阪村教育委員会

国 史 跡

楠 木 城 跡

千早赤阪村埋蔵文化財調査報告書 第5輯

2 0 0 8 . 3

千早赤阪村教育委員会

## は じ め に

楠木城跡は、楠木正成によって築城されたといわれている山城です。これまで多くの城郭研究者によって調査が行われてきましたが、今回、はじめて発掘調査を行いました。

本調査では楠木正成の時代まで迫ることはできませんでしたが、表面観察では判らない建物跡などが検出され、大きな成果をあげることができました。

調査の実施にあたっては、史跡整備委員会の先生方をはじめ多くの方々のご理解・ご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

今後とも、本村の文化財行政にご協力いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成20年3月

千早赤阪村教育委員会

教育長 山 本 澄 雄

## 例 言

1. 本書は、史跡保存整備に伴う四史跡楠木城跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、千早赤阪村教育委員会社会教育課 主事 西山昌孝、和泉大樹を担当者として実施し、平成17年度調査を平成17年9月5日に着手し9月30日に終了、平成18年度調査を平成18年8月23日に着手し11月30日に終了、平成19年度調査を平成19年5月23日に着手し12月31日に終了した。引き続き遺物整理作業を行い平成20年3月31日に完了した。
3. 本書の執筆・編集は和泉、西山が行った。文責は文末に記する。
4. 挿図の方向は国土座標に基づく座標北を示し、標高はT.Pで標示した。
5. 調査の実施については、地権者をはじめ多くの方々から指導・助言を受けた。記して感謝の意を表したい。(順不同・敬称略)  
大橋 茂、尾谷雅彦(河内長野市教育委員会)、高松雅文(大阪府立近つ飛鳥博物館)、  
地村邦人(大阪府教育委員会)、讀 伸一郎(堺市教育委員会)、中池佐和子(大阪大谷  
大学文化財学科助手)、福田英人(大阪府教育委員会)、藤田徹也(富田林市教育委員会)  
道田淳一、三好 玄(大阪府教育委員会)、(社)千早赤阪村楠公史跡保存会
6. 調査に参加した者は、下記の通りである。  
周藤光代、岩子苑子、菊井由起子、枝松悦子、福田夏子、松尾彬旦、西尾雅博、  
千早赤阪村郷土史友の会、河内長野市文化財ボランティア、千早赤阪村立中学校
7. 本書では、赤坂城跡(下赤坂城跡)、楠木城跡(上赤坂城跡)と史跡指定の名称にくわえて、  
地元で使用されている一般的な名称を括弧書きで記した箇所がある。その際は「坂」ではなく  
「坂」を用いた。また、「赤坂城塞群」はその出典に準じて「坂」と記した。

# 目 次

はじめに 千早赤阪村教育委員会教育長 山本澄雄

例言

目次

1. 地理的と歴史的環境	
(1) 地理的・歴史的環境	1
2. 調査に至る経緯と体制	
(1) 調査に至る経緯	3
(2) 調査体制	3
(3) 委員会の経緯	5
(4) 調査の方法	5
3. 平成17年度の調査	
(1) 層序	7
(2) 検出遺構	8
(3) 出土遺物	10
4. 平成18年度の調査	
(1) 層序	11
(2) 検出遺構	11
(3) 出土遺物	12
5. 平成19年度の調査	
(1) 層序	14
(2) 検出遺構	14
(3) 出土遺物	15
6. まとめ	
(1) 調査の成果	17
(2) 赤坂城寒群の中の楠木城	18
(3) 今後の課題	19
付章	
楠木城跡（上赤坂城跡）における採集遺物について	21

## 挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図 (1/20,000)	2
第2図	調査区位置図 (1/2,000)	6
第3図	平成17年度調査区遺構配置図 (1/80)	7
第4図	S P 14平面図・断面図 (1/10)	8
第5図	S B 1・2・3平面図・断面図 (1/50)	9
第6図	出土遺物 (1/2、1/4)	10
第7図	出土遺物 (1/2、1/4)	12
第8図	平成18年度調査区遺構配置図 (1/80)	13
第9図	平成19年度調査区遺構配置図 (1/80)	14
第10図	出土遺物 (1/2、1/4)	15
第11図	平成18・19年度調査区周辺図 (1/180)	16
第12図	楠木城跡縄張図	18
第13図	採集遺物実測図	23

## 図 版 目 次

図版1	平成17年度調査区1
図版2	平成17年度調査区2
図版3	平成18年度調査区
図版4	平成19年度調査区
図版5	出土遺物1
図版6	出土遺物2
図版7	楠木城跡1
図版8	楠木城跡2

## 1. 地理的・歴史的環境

### (1) 地理的・歴史的環境

大阪府下唯一の村である千早赤阪村は、大阪府の南東部に位置する。行政区では、北・西・南側を大阪府南河内郡河南町、富田林市、河内長野市と、東側を南北に連なる金剛山地を境に奈良県御所市、五條市と接する。村の総面積の37.38km<sup>2</sup>のうち、82.4%を山林が占めるが、このことは、「赤坂城塞群」と呼ばれる中世山城密集地となるに相応しい地であることを今なお、看取することができる。

今回調査を行った国史跡楠木城跡は、金剛山地から派生する数本の尾根筋のうち、千早川と足谷川の間の尾根筋に位置する。ここから南側、金剛山頂にかけては多くの山城が連携をもって密に点在する。

国史跡楠木城跡から北側は、河南台地などのフラットな地形が認められ、山林が多くを占める本村にあっては希少な平地地であり、集落遺跡等が集中する地域となっている。

旧石器・縄文・弥生時代の生活痕跡はほとんど確認されていないが、楠公誕生地遺跡などからは、縄文時代後期磨消縄文土器片や石鏃などのサカイト製の石器類が出土している。また、昨年度に発掘調査を行った人森遺跡からは、縄文時代中期末の上器片が出土している。

国史跡楠木城跡から約1.5km北西には、国史跡赤坂城跡がある。赤坂城跡の付近には、「矢場武」・「甲取」・「城ヶ越」などの城跡と関連のある小字名が残る。この城跡のある丘陵には、森屋古墳群がある。残念ながら、古墳群は戦前から戦後すぐにかけてのみかん山開墾や道路設置に伴い、現在は見る影もないが、手持器台などが付近から採集されており、古老の話によれば石室の存在が伝えられている。また、赤坂城跡の北東には、2基の家形石棺を検出した6世紀末から7世紀初頭の御旅所北古墳や御旅所古墳、東には浄心寺山古墳がある。また、赤坂城跡丘陵裾部や北側の森屋西遺跡、楠公誕生地遺跡からは飛鳥・平城段階の土師器や須恵器が出土している。

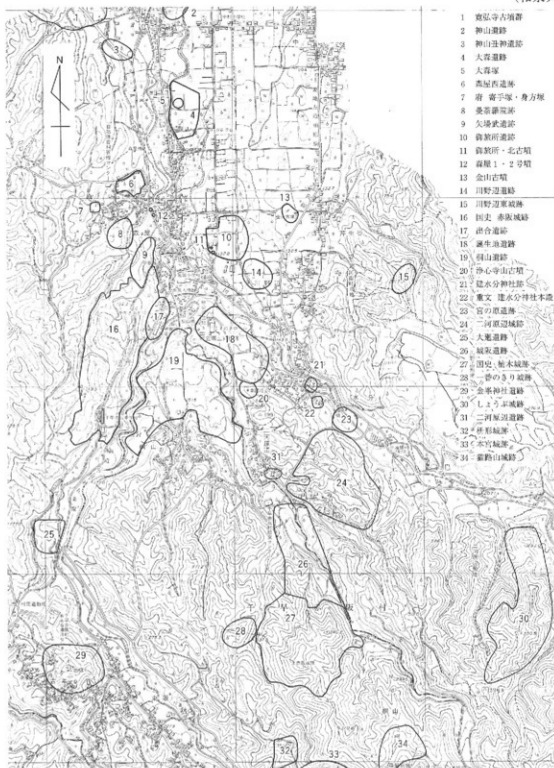
鎌倉時代末頃には、金剛山地は修験道の地として繁栄した。金剛山頂にある転法輪寺を中心に、多聞寺・修道子・坊領千軒・朝原寺・高天寺・石寺・大沢寺の7つの寺院が配置され、金剛七坊と呼ばれた。このうち、多聞寺・修道子・坊領千軒については、千早赤阪村に位置し、坊領千軒には今なお礎石が残る。

『太平記』で広く知られているように、本村は南北朝動乱の舞台となった場所であり、多くの山城跡が存在する。史跡指定を受けている千早城跡・楠木城跡（上赤坂城跡）・赤坂城跡（下赤坂城跡）をはじめ、二河原辺城跡・本宮城跡・しょうぶ城跡・梶形城跡・翁路山城跡・坊領山城跡（国見山城跡）などの山城が多数存在し、これらは赤坂城塞群と呼ばれている。

館跡と考えられている候補地は2箇所ある。いずれも赤坂城跡から約500m、楠木城跡から約2kmとセツト関係を想定しうる位置にある。楠公誕生地遺跡と桐山遺跡である。楠公誕生地遺跡は、平成3・4年にかけて「くすのきホール」建設に伴って発掘調査が行われており、2重の堀に囲まれた建物跡を確認している。出土遺物は14世紀代のものが多い。桐山遺跡は、建武の中興以降楠木邸跡と伝

えられており、「古屋敷」・「花屋敷」・「光明院跡」などの小字名が残り、中世土器や瓦が現在でも採集できる。また、楠木正成に縁のある石造五輪塔や重要文化財の指定を受けている建水分神社などの文化財が点在する。

(和泉大樹)



第1図 周辺遺跡分布図 (1/20,000)



## 2. 調査に至る経緯と体制

### (1) 調査に至る経緯

本村では、平成7年度に「国史跡千早城跡・楠木城跡・赤阪城跡保存管理計画」の策定を目的として、策定委員会を設置し、平成11年度に同計画を策定した。続いて、本村の特色を活かした史跡整備を目指すべく、平成13年度に国史跡千早城跡・楠木城跡・赤阪城跡整備計画策定委員会を設置し、審議を重ね、まずは、現状変更の増加が顕著である国史跡赤阪城跡の整備に着手することを決定した。

国史跡赤阪城跡については、平成15年度に策定した『史跡赤阪城跡整備基本計画』に則り、城跡の南側に眺望学習広場を設置し、第1期整備事業とした。引き続き第2期整備事業として確認調査を行う予定であったが、現状の大半が田畑であり、財政状況が厳しく、直ぐに用地取得が困難である折、取得を前提条件としない調査の継続は困難であったため、現状が山林である楠木城跡の確認調査へと移行することとし、平成17年度より史跡楠木城跡の確認調査を行うに至った。なお、その際、平成17年度から19年度の3ヶ年を一つのスパンとして報告書を刊行し、一旦、調査成果をまとめるという方法をとった。

### (2) 調査体制

#### 平成17年度 調査体制

##### 【国史跡千早城跡・楠木城跡・赤阪城跡整備計画策定委員会】

村田修三	大阪大学大学院名誉教授
増田 昇	大阪府立大学大学院農学生命科学研究科教授
高瀬要一	奈良文化財研究所文化遺産研究部遺跡研究室長
広瀬和雄	国立歴史民俗博物館教授
故 岡本 勇	社団法人千早赤阪楠公史跡保存会理事長
大橋慶二	社団法人千早赤阪楠公史跡保存会理事長 2月から
丹上 務	大阪府教育委員会文化財保護課長
岡山真美	千早赤阪村文化財保護審議会委員長
山本澄雄	千早赤阪村教育委員会教育長
酒見昌男	千早赤阪村教育委員会教育次長 9月まで 部長制廃止により10月から
清水止幸	千早赤阪村総務部総務課長 9月まで
尾谷 肇	千早赤阪村総務課長10月から
西浦光輝	千早赤阪村事業部産業建設課長 9月まで 千早赤阪村建設課長10月から

【事務局】

山本恵一	千早赤阪村教育委員会事務局社会教育課長
西山昌孝	千早赤阪村教育委員会事務局社会教育課主事（調査担当）
和泉大樹	千早赤阪村教育委員会事務局社会教育課主事（調査担当）

平成18年度 調査体制

【国史跡千早城跡・楠木城跡・赤阪城跡整備計画策定委員会】

村田修三	大阪大学大学院名誉教授
増田 昇	大阪府立大学大学院農学生命科学研究科教授
高瀬要一	奈良文化財研究所文化遺産部長
広瀬和雄	国立歴史民俗博物館教授
大橋慶二	社団法人千早赤阪楠公史跡保存会理事長
丹上 務	大阪府教育委員会文化財保護課長
岡山真美	千早赤阪村文化財保護審議会委員長
山本澄雄	千早赤阪村教育委員会教育長
尾谷 肇	千早赤阪村総務課長9月まで
西浦和彦	千早赤阪村総務課長10月から
西浦光輝	千早赤阪村建設課長

【事務局】

山本恵一	千早赤阪村教育委員会事務局社会教育課長9月まで
尾谷 肇	千早赤阪村教育委員会事務局社会教育課長10月から
西山昌孝	千早赤阪村教育委員会事務局社会教育課主事（調査担当）
和泉大樹	千早赤阪村教育委員会事務局社会教育課主事（調査担当）

平成19年度 調査体制

【国史跡千早城跡・楠木城跡・赤阪城跡整備計画策定委員会】

村田修三	大阪大学大学院名誉教授
増田 昇	大阪府立大学大学院農学生命科学研究科教授
高瀬要一	奈良文化財研究所文化遺産部長
広瀬和雄	国立歴史民俗博物館教授
大橋慶二	社団法人千早赤阪楠公史跡保存会理事長
富尾昌秀	大阪府教育委員会文化財保護課長
岡山真美	千早赤阪村文化財保護審議会委員長

山本澄雄	千早赤阪村教育委員会教育長
西浦和彦	千早赤阪村総務課長
西浦光輝	千早赤阪村建設課長

## 【事務局】

尾谷 肇	千早赤阪村教育委員会事務局社会教育課長 2月24日まで
北浦秀明	千早赤阪村教育委員会事務局社会教育課長 2月25日から
西山昌孝	千早赤阪村教育委員会事務局社会教育課主事（調査担当）
和泉大樹	千早赤阪村教育委員会事務局社会教育課主事（調査担当）

## (3) 委員会の経過

史跡楠木城跡に係る委員会

第4回委員会 平成17年3月25日

- ・平成17年度調査トレンチを主郭北側に設定することを決定。
- ・分布調査の必要性を確認。

第5回委員会 平成18年4月26日

- ・平成17年度の調査成果を報告。
- ・平成18年度調査トレンチを主郭南側の上段部と下段部に架かるように設定することを決定。

第6回委員会 平成18年12月13日

- ・平成18年度の成果を報告。
- ・平成18年度調査トレンチを南側へ5m拡張することを決定。

第7回委員会 平成19年10月22日

- ・平成19年度の調査成果を報告。
- ・今後、市町村合併が進展しようとも、国史跡への取り組みは継続させていく旨の提言を取りまとめる。

※ 第1回～3回委員会は、国史跡赤阪城跡に関する委員会のため、第4回から記載する。

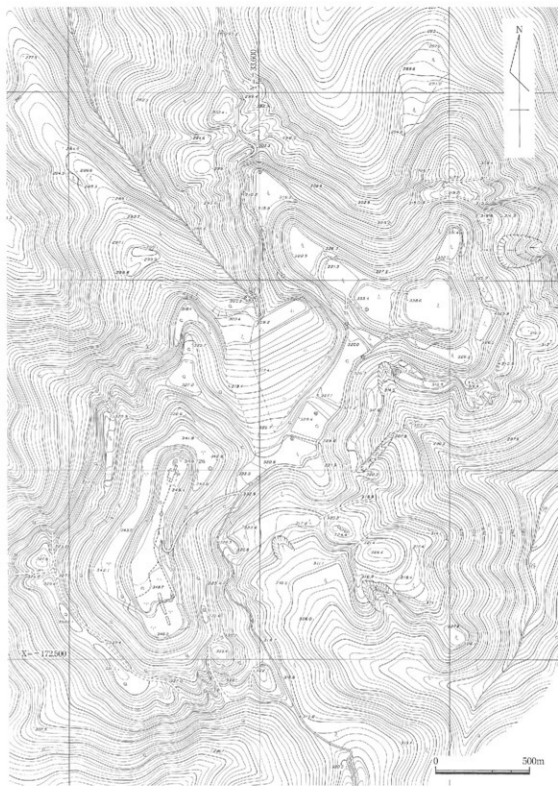
(和泉)

## (4) 調査の方法

主郭の北部平坦地、南部上段から下段の平坦地、下段平坦地の部分に3ヶ所の調査区設定し調査を行った。調査区は狭い山道を登った山頂という位置にあり、遺構に影響を与えることなくバックホウ等の重機を搬入することは不可能である。そのため、すべての掘削を入力で行い、埋め戻しも人力で行った。

測量については基準点を設置し、これに基づいて平板測量等を行った。

(西山昌孝)

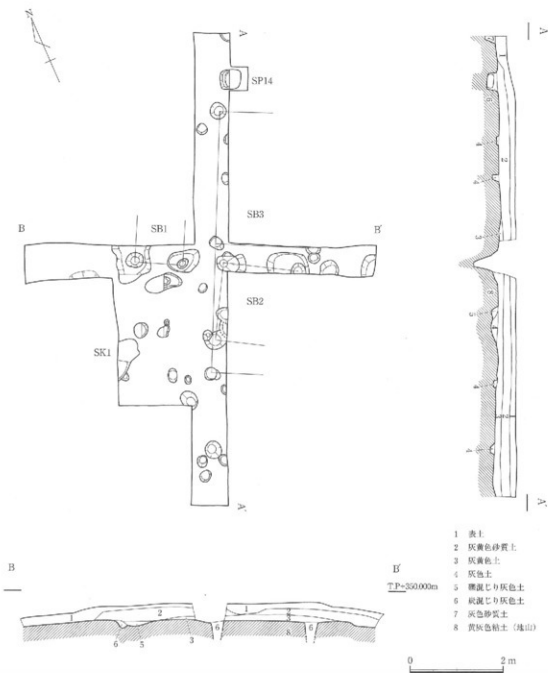


第2図 調査区位置図 (1/2,000)

## 3. 平成17年度の調査

## (1) 層序

平成17年度の調査区は、主郭北側の平坦地に位置する方形の高まりの部分に、十字にトレンチを設定した。基本土層は3層あり、1面の遺構面を確認した。第I層は、表土である。第II層は灰黄色砂質土で、瓦質土器・土師器・国産陶磁器などが出土する中世の包含層である。第III層は灰黄色土で、トレンチ南側のみに残る土層である。遺構面を覆う中世の包含層で瓦質土器・土師器・国産陶磁器・



第3図 平成17年度調査区遺構配置図 (1/80)

輸入陶磁器などが出土する。第Ⅳ層は地山で、黄灰色粘質土である。

(2) 検出遺構

SB1 (第5図)

東西トレンチ西側に位置する掘立柱建物である。主軸は $W-26^{\circ}30'-N$ を示す。1間×1間(1.00m×1.00m)建物である。柱間は約1.2mを測る。掘方は2段になっており、上面は不定形、柱穴自体の掘方は円形で径38cm、深さ50cmを測る。埋土は炭混じり灰色土で、遺物は瓦質土器・土師器・焼土などが出土している。

SB2 (第5図)

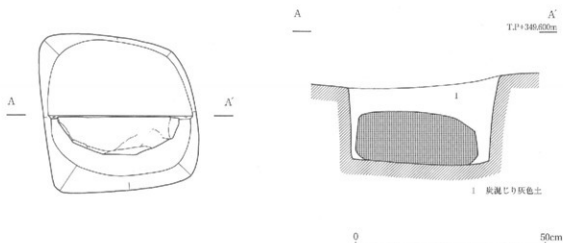
東西トレンチ西側に位置する掘立柱建物である。主軸は $N-30^{\circ}00'-E$ を示す。1間×1間(南北1.62m×東西1.60m)建物である。柱間は約1.6mを測る。掘方は円形で径28~30cm、深さ24~40cmを測る。埋土は炭混じり灰色土で、遺物は土師器・焼土などが出土している。南西隅のSP3からは、土師器のほか銭貨が出土している。

SB3 (第5図)

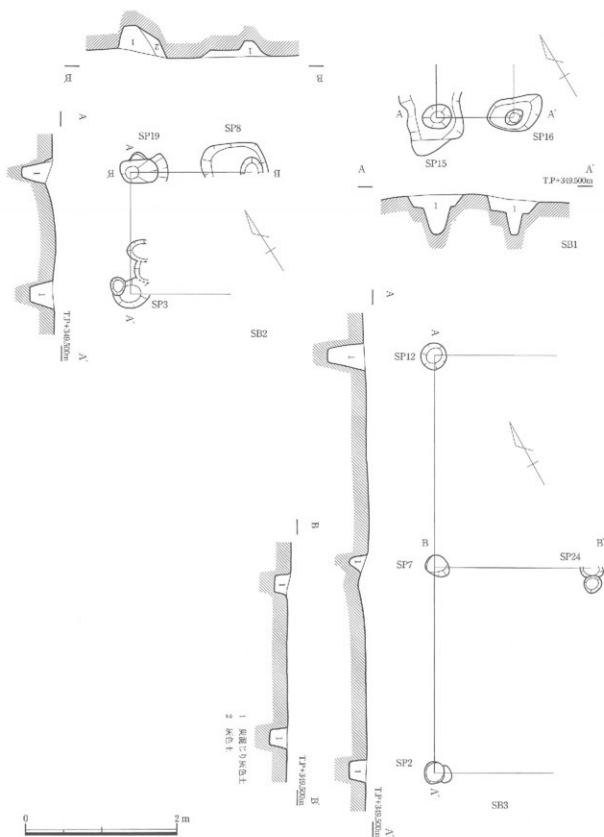
南北トレンチから東西トレンチ東側に位置する掘立柱建物である。主軸は $N-26^{\circ}30'-E$ を示す。桁行2間×梁間1間(5.54m×2.10m)建物である。桁行の柱間は約2.7m~2.8mを測る。掘方は円形で径30cm、深さ20~50cmを測る。埋土は炭混じり灰色土で、遺物は瓦質土器・土師器・国産陶器が出土している。この建物は南北へ延びる可能性はあるが、曲輪が狭く法面がせまるためこれ以上東へ延びることは不可能である。

SP14 (第4図、図版2)

掘方が方形の柱穴である。幅40cm、深20cmを測る。内部より円形の根石が検出された。石材は金



第4図 SP14平面図・断面図 (1/10)



第5図 SB1・2・3平面図・断面図 (1/50)

剛山・葛城山より産出する葛城石英閃緑岩を使用している。彫成は粗削りを行ったのみで、細い彫成は行っていない。埋土は炭泥じり灰色土で、遺物は炭化物のみの出土である。他に根石を使用した柱穴はなく、これに対応する柱穴は確認されていない。

(3) 出土遺物 (第6図、図版5・6)

1は京都系の土師器皿である。底部に凹みをもつ、いわゆる「ヘソ皿」である。口径6.5cm、器高1.6cmを測る。口径に比べて底部径は小さい。2は瓦質皿で、口径9.8cm、器高1.8cmを測る。口縁端部を小さく立ち上げる。尾谷編年5類と考えられる。15世紀前半と考えられる。3は片口の播鉢である。内面ハケ目調整の後、播り目を施す。火を受けており、色調は赤褐色である。

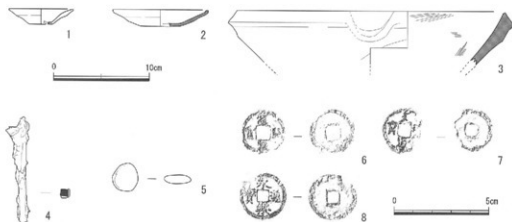
4は、鉄製品で断面方形の釘である。5は白色楕円形の薄材状石製品である。

6～8は銭貨である。6・7は北宋銭で6は元祐通宝(初鑄:1086年)で地山直上からの出土である。7は天禧通宝(初鑄:1017年)でSP3から出土している。8は永樂通宝(初鑄:1411年)で、主郭青側の平坦地からの表採である。

また、小片ではあるが貿易陶磁器が出土している(図版5)。1は13～14世紀ごろの白磁片でSK1から出土している。2は端反りの口縁をもつ青磁碗である。15世紀前半と考えられる。3は15世紀中・後半の雷文帯を施した青磁碗である。4は15世紀ごろの細書連弁文を施した青磁碗で、茶碗原からの表採である。

この他に小片で図化できなかったが土師質甕、備前播鉢、焼けた壁土、釘、サスカイト、炭化物などが出土している。

(西山)



SP3(7)、SP8(2)、SP19(1・3)、SP33(4)、播鉢(6)、灰青色砂質土(5)、表採(8)

第6図 出土遺物 (1/2、1/4)



#### 4. 平成18年度の調査

##### (1) 層序

一様に覆う表土を除去後、トレンチ上段（北側）では茶褐色粘質土（②層）、灰黄色粘質土（③層）、黄褐色粘質土（④層）が堆積する。これらトレンチ上段の上層は、下方へ押される状態で3つの層に分層されることから、一気に自然堆積した状況ではなく、人為的堆積により途切れた状況を表すものである可能性がある。これに比して、トレンチ下段（南側）の灰褐色粘質土（⑤層）の堆積は水平、均等な様を呈する。

なお、これら各々の層には遺物が包含され、とりわけ、⑤層からは今回の出土遺物の大半が出土している。また、トレンチ北端では橙黄色粘土（⑥層）が山状ブロックで混入する。

これらの下位で地山と考えられる灰白色粘質土（⑧層）の面を検出したが、トレンチ上段から斜面部分については、その上位に比して軟質の灰白色粘質土（⑦層）を検出した。

これら両層からの遺物の出土は見られない。

なお、トレンチ上段及び斜面部分においては、②～④層の人為的堆積の可能性を考えたため、確認調査の現時点では、それらを除去し地山と考えられる面まで掘り下げておらず、この箇所での地山と考えられる面の確認はジョレン幅の測溝範囲での確認に留まるものである。

以上が調査トレンチの層序であるが、先に記したように斜面部分についてはジョレン幅での掘削による確認であり、②～④層下位の遺物の有無の確認、また、現時点で地山であろうと想定している⑧層について、その確認のためにさらに掘り下げるなどの課題を残すものである。

##### (2) 検出遺構

先に記したように、②～④層が堆積する箇所では地山と考えられる面まで掘り下げておらず、この箇所での遺構の有無は未確認であるが、トレンチ下段では遺構を検出した。

検出した遺構は、柱穴、溝状遺構、不整形な土坑等であり、トレンチ南端に密に遺構が配置される傾向にある。このうち柱穴については、ほぼ南北方向に軸をもつものと北北西に軸をふるものの2パターンの柱穴列があると考えられる。柱穴は、前者で直径約0.3m、柱間約2.0m、後者で直径約0.5m、柱間約2.5mを測るもので、両者は交差することから2時期の所産であることが推測できる。

また、トレンチ中央部で検出した柱穴は、斜面の裾部分の成形（⑦層のカット）と一連のものである可能性が高く、今後の調査では、柱穴等の遺構と地形の人為的改変という両者の関係に注意していく必要がある。

なお、遺構については平面プランのみの確認であり、遺構埋土を掘っていないため時期については未確認である。

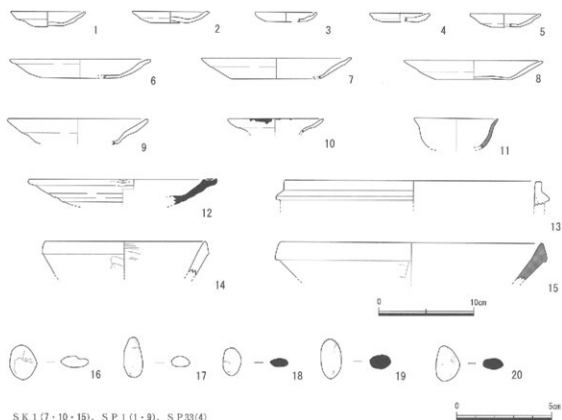
(和泉)

## (3) 出土遺物 (第7図、図版5・6)

1～10は土師器皿である。1～5は小皿、6～9は中皿、10はヘソ皿である。11(図版5-7)は貿易陶磁器である。口縁を端反りする。小型の白磁で壺と考えられる。12は灰緑色の灰釉が施された古瀬戸である。小片のため卸目は確認できなかったが、口縁の形態から皿鉢と考えられる。13・14は土師質土器である。13は火鉢である。蓋のある火鉢で、蓋を受ける鉢の口縁部にあたる。16世紀末ごろのものである。14は鉢である。色調は赤褐色で、調整はひじょうに粗い。15は瓦質搦鉢である。16～20は楕円形、または不定形の薄材状石製品である。16・17は白色、18～20は黒色である。一般的には、このような石製品は基石と考えられているが、大きさ、厚さともに均質ではなく、色調も白黒の差が明瞭でない。

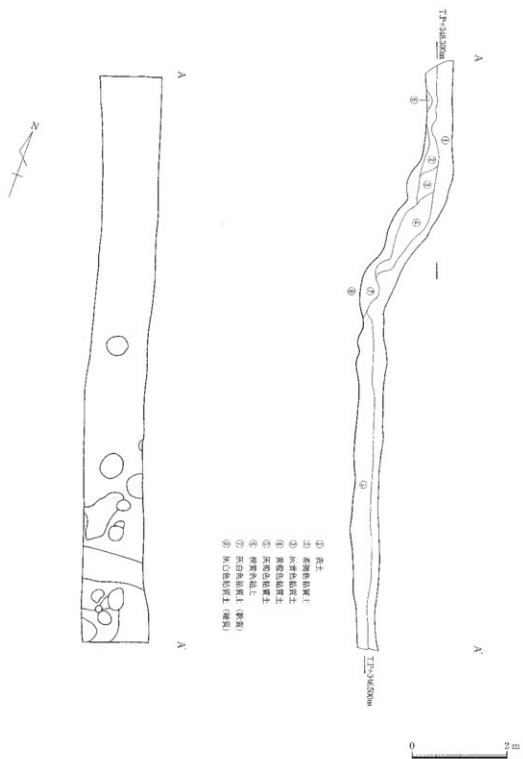
この他に小片で図化できなかったが瓦質甕、土師質甕、備前壺、常滑甕、15世紀の細線蓮弁文を施した青磁碗、無文の碗など貿易陶磁器、焼けた墼土、釘、サヌカイト、結晶片岩、炭化物などが出土している。

(西山)



SK 1 (7・10・15)、SP 1 (1・9)、SP 33(4)  
 灰緑色粘質土(4・6・12・14・18～20)、茶褐色粘質土(11・16)  
 搦土(2・5・8)、表土(13・19)

第7図 出土遺物 (1/2、1/4)



第8図 平成18年度調査区遺構配置図 (1/80)

## 5. 平成19年度の調査

### (1) 層序

前述した平成18年度調査トレンチの南側に拡張したトレンチであり、その層序を継続させる。

表土下、遺物包含層である灰褐色粘質土（⑤層）が堆積する。その下位で灰白色粘質土（⑧層）の地山と考えられる面を検出した。この面は南方向へとそのレベルを低くし、質感はトレンチ北端では硬質であるが、中央から南端にかけては軟質で混在性に富むものであり、この部分については人為的な可能性が否めない。今回の調査では、この面で遺構を検出しており、さらに掘り下げて下位の状況を確認していないが、下位から北端で検出した硬質の灰白色粘質土層が検出される可能性がある。

なお、トレンチ東壁断面中央付近では植物根による攪乱が認められる。

### (2) 検出遺構

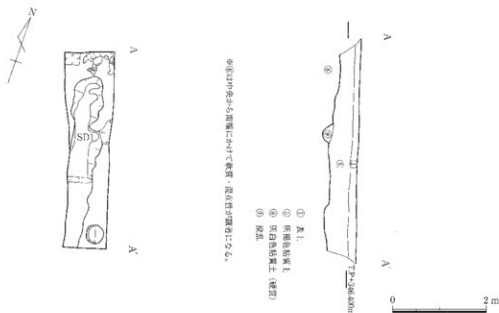
地山と考えられる面で被熱痕跡のある遺構、溝状遺構、柱穴を検出した。

トレンチ北端で被熱痕跡のある遺構を検出した。遺構は粘土状のものが火を受けて固まったものと考えられる。上面はフラットである。

トレンチ中央部では南北方向に溝状の遺構を検出した。遺構は南北3.75m、東西0.70m、深さ0.25mを測る。この遺構の北半分を掘削したが、埋土は灰色粘質土の単純層で、第10図8・10・11などの遺物が出土した。なお、遺構は一部植物根による攪乱を受ける。

トレンチ南端では柱穴1基を検出した。直径約0.4mを測る。埋土は灰色粘質土で、深さ0.25mを測る。

(和泉)

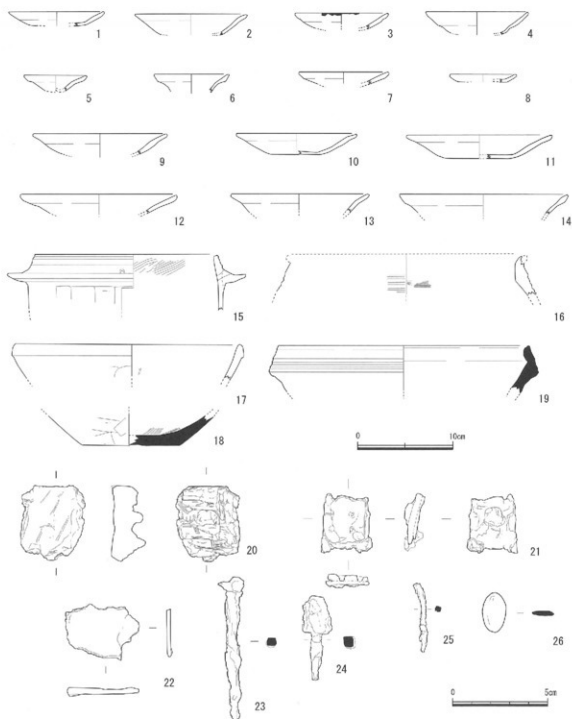


第9図 平成19年度調査区遺構配置図 (1/80)

※層の番号は第8図

## (3) 出土遺物 (第10図、図版5・6)

1～14は土師器皿である。15は土師質羽釜で、口縁部に穿孔する。16は土師質甕である。外面には粗い叩き目、内面には粗い刷毛目を施している。17は土師質鉢である。外面の調整は非常に粗い。



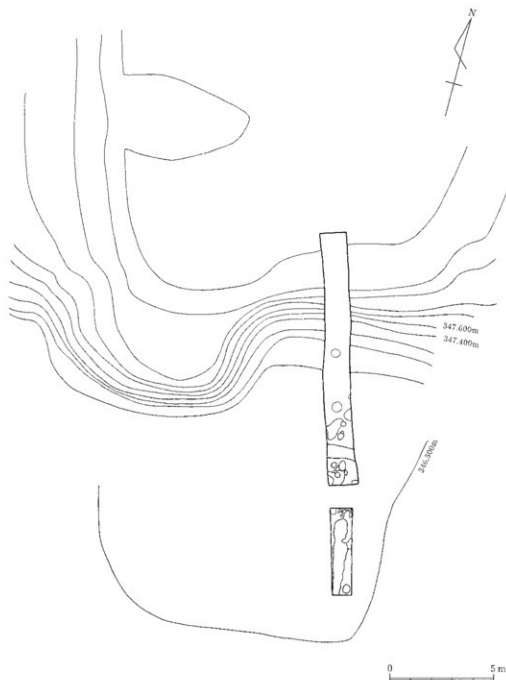
S D 1 (8), S K 1 (6・10・11・14・26・28), S P 1 (5・9), 灰褐色粘質土(1～4・7・12・13・15～25)

第10図 出土遺物 (1/2、1/4)

20は壁土である。スサや竹の圧痕がみられる。二次焼成を受けている。21～25は鉄製品である。21は2枚の鉄板を重ねており、2列の穿孔がみられ小札と考えられる。26は黒色楕円形の薄材状石製品である。

この他に小片で図化できなかったが備前、常滑、15世紀の青磁の香炉（図版5-13）などの貿易陶磁器、焼けた壁土、釘、二上山系凝灰岩、炭化物に混じって炭化した竹などが出土している。

(西山)



第11図 平成18・19年度調査区周辺図 (1/180)

## 6. まとめ

### (1) 調査の成果

平成17年度から3カ年の発掘調査で、主郭に良好な遺構が遺存していることが判った。

平成17年度の調査区では建物3棟、平成18・19年度の調査区からも建物の可能性がある柱穴列を確認した。

平成17年度の調査で検出した建物は、すべて掘立柱建物である。これらの性格は不明ではあるが、SB1の柱穴は他の建物に比べて深く、柱間が狭いことから、性格の異なる建物であったと思われる。スサ泥じりの壁土が多く出土していることから、上壁の建物が存在したと考えられる。SP14で検出した根石は、これに対応する柱穴を確認することができなかった。ほかに根石を伴った建物が存在すると思われる。平成18年度の調査は、遺構を掘削することができなかったので遺構の存在のみの確認となった。柱穴や溝が検出されており、建物復元が可能かも知れない。平成19年度の調査では、柱穴と溝を検出した。溝からは多くの遺物が出土している。

上郭で検出される遺構からは焼土・炭化物が混入しており、火災があったと考えられる。現在のところ直接火を受けている遺構は平成19年度調査区の土壌のみで、ほかに遺構の最終段階で火災があったものはない。

遺物のほとんどは土師器皿で、15～16世紀のものと考えられるものが多い。しかし、このいわゆる京都系土師器皿は時期の確定がむずかしく、楠木城の使用時期を判断する材料にはなりにくい<sup>(1)</sup>。瓦質皿では尾谷編年5類の皿が出土している<sup>(2)</sup>。遺物の時期は15世紀前半と考えられる。貿易陶磁器も破片ではあるが多く出土している。遺物の時期は、14世紀以前と15世紀代のものに大別できる。器種は碗がほとんどであるが、香炉も出土している。他に備前の播鉢や古瀬戸の郎皿や土師器化した鉢などからすると、おもな出土物は15～16世紀のものといえるであろう。時期の下限は土師質火倉で16世紀末と考えられる<sup>(3)</sup>。

上限については、明確な時期を示す遺物はない。13・14世紀ごろの常滑甕の破片は出土しているが伝世品の可能性が高い。しかし、瓦質播鉢の出土より、14世紀後半の使用は窺うことができるであろう。

これらのことから、楠木城は14～16世紀にかけて使用された城郭であることが判った。しかし、今回行った3カ年の調査では、築城時期を示す遺構・遺物は確認することはできなかった。

火災については、『太平記』に元弘元年(1331)と延文5年(1360)の記述がある。2つの出火の性格は、城を放棄する際に自ら放火したとされている。『太平記』では、楠木城と赤坂城の区別が無く「赤坂の城」とされている。元弘元年の火災は、その記述から赤坂城を指すものと考えられる。

延文5年の火災については、どちらの城であるかの意見は分かれるが、今回の調査の成果から楠木城の可能性を考えることができるであろう。

城の廃絶は16世紀末まで下る可能性が指摘できる。『信長公記』<sup>(4)</sup>によると、河内地域は天正3年



第12図 楠木城跡縄張り図 (4)

(1575)に河内一国内の全城郭を破却したとされている。その後も城としての使用かどうかは不明ではあるが16世紀末まで何らかの使用があったことが判った。

(西山・和泉)

## (2) 赤坂城塞群の中の楠木城

金剛山麓に集中して分布する城塞群は、村田修三氏によって赤坂城塞群として位置づけられている<sup>(6)</sup>。城塞群は東部の水越川から足谷川の間、中央部の足谷川から千早川の間、西部の千早川の左岸に分けることができる。それぞれの城は、尾根を登ると金剛山に行くことができる。この城郭の分布には特徴がある。

東部城塞群は未発達な城塞群である。しょうぶ城跡は、南北朝時代の築城とされている。二河原辺城跡も主郭を除けば簡単な平坦地しかない。中央部は、東部に比べて発達をしている。楠木城跡は城の前後に複数の堀切を設けた山城である。主郭には横堀や堅堀も設けている。楠木城跡の背後にある猫路山城跡や国見山城跡は、東部の城塞群に比べると発達がみられる。西部城塞群は不明な点が多い。楠木正成が蜂起したといわれる赤坂城跡は、史跡指定当初から主郭の位置さえ判らない。吉年城跡と考えられる金峯神社には明確な遺構はないが、使用された可能性は高い。寛正4年(1463)に吉年で合戦が行われており、このころに使用されたと城と考えられる<sup>(7)</sup>。さらに尾根を登ると八国城跡な



どがあるが、遺構はなく尾根上の高まり程度で、現状では城であるかどうかの判断はできない。

この3つの城域を比較すると使用時期の幅に違いがあることが判る。中央部に対して東部・西部城塞群が明確でないのである。この2つの地区は簡単な平坦地を設けるか、山の高まりを使用した南北朝期の山城の特徴を備えていると言い換えることができるであろう。

中央部は楠木城、猫路山城、国見山城などは、堀などの改修が見られ、新しい要素が付加されている。そのなかでも、楠木城は改修され城塞群ではもっとも最後まで使用があったものと考えられる<sup>(1)</sup>。とくに、楠木城前面のそろばん橋といわれる堅掘群と対応するように南側、背後に大きな堅掘を造り、楠木城で完結する山城への改修が行われた。

赤坂城塞群が造られた時には金剛山を背後に3つの方面に城を配置したが、その後中央部のみの使用になり、最後は楠木城を単独の城として使用するように変遷していったのであろう。

千早谷<sup>(2)</sup>には赤坂城塞群のほかにも多くの山城がある。赤坂城塞群の北、赤坂城と同じ尾根の北端に位置する叢山城跡<sup>(3)</sup>が調査され、16世紀後半には使用されなくなったと考えられる。このころは南河内地域で寺内町が成立し始める時期で、周辺に富田林寺内町、大ヶ塚寺内町が成立する。千早谷の情勢が大きく変化し、千早谷から不安要素が消え、安定した状況に至ったと考えられる。この城郭や寺内町の消長をみると、16世紀後半に千早谷は中世を終え、近世を迎えたといえるであろう。

(西山)

### (3) 今後の課題

今回の調査は、国史跡楠木城跡における初めての発掘調査であった。

初めての発掘というだけでもその意義は大きい。柱穴遺構の検出という建造物の存在が確認されたという大きな成果を得ることができた。このことは、縄張調査・採集遺物の整理等でしか情報を得ることのできなかつた従来に比すれば、極めて大きな進歩であると評することが可能であろう。

が、同時に、これから取り組むべき多くの課題も得ることとなった。

以下、主要なそれぞれについて記すとともに、楠木城跡の開始と終焉、画期とその時期毎における城の様相について明らかにし、史跡整備へと繋げるべく、今後も発掘調査を継続していくことの必要性を確認して当報告を締め括る。

- ・平成17年度調査において、トレンチ北側で検出されたS P 14とセットになる柱穴を確認する必要がある。また、構造が違う柱穴の確認という結果をどのように評価するのか。
- ・平成18年度調査において、交わる柱穴列を検出したが、遺構の平面プランのみの確認であるため、時期がわからない。今後、遺構埋土を掘り、柱穴列の2時期を確定したい。

- ・平成18・19年度調査において、人為的な可能性のある堆積を確認した。造成作業等の範囲規模・時期などを見極める必要がある。
- ・出土遺物から考えられる楠木城跡の時間幅は、14世紀前半から16世紀後半であるが、この間の画期を確認することが重要である。このことは、城の改修時期等を考察するうえで大変重要である。

(和泉・西山)

## 注

- (1) 西山昌孝「南河内における中世後期の土師器皿」(『南河内における中世城館の調査』大阪府教育委員会、2008年)
- (2) 尾谷雅彦「天野山金剛寺出土の上釜埋納土器について」(『天野山金剛寺遺跡』河内長野市教育委員会、1994年)
- (3) 讀 伸一郎氏のご教示による。
- (4) 富田林市教育委員会 藤田徹也氏の浄書による。
- (5) 『信長公記』(『羽曳野市中世軍記等史料集』羽曳野市、1990年)
- (6) 村田修三「赤坂城塞群」(『図説 中世城郭事典』3 新人物往來社、1987年)
- (7) 文書では、吉年が淀子、淀志と記されている。「毛利家文書」7月17日付、7月20日付、8月12日付(『萩藩調目録』)ほか。
- (8) 西山昌孝「上赤坂城の変遷について」(『太平記の村 特別講座資料』、2000年)
- (9) 本来、千早川は石川の合流点から千早赤阪村森屋で水越川と合流するまで関を東條川、これより上流を千早川と呼ばれていたが、ここでは現在の名称である千早川とし、千早川が流れる谷を千早谷とする。
- (10) 『西大寺山古墳群現地説明会資料』(富田林市遺跡調査会、1996年)ほかによる。

## 楠木城跡（上赤坂城跡）における採集遺物について

和 泉 大 樹

### 1. はじめに

大阪府の南東部に位置する千早赤阪村は、楠木正成が葛城山・金剛山を頂きとする金剛山地の険しい地形を利用して山城を築き、幕府軍に応戦した地として広く知られている。

赤坂城跡（下赤坂城跡）・楠木城跡（上赤坂城跡）・千早城跡の3つの山城跡は、昭和9年という比較的早い段階で国史跡に指定されている。これらを含む千早赤阪村の山城は、戦国時代等、後世に改修がなされた可能性が極めて高いものの、そのはじめは基本的に南北朝時代に遡ると考えられる。

しかし、これらの山城跡では、本格的な発掘調査は行われておらず、縄張図が公開されているに留まり、城跡に関する情報は不足している状況にあると言える。

そこで、城跡で表面採集されている遺物を報告することで、数少ない情報の足しの一助になればと考え、過去に楠木城跡（上赤坂城跡）で表面採集された遺物についてここに報告するものである。

### 2. 位置と環境

楠木城跡（上赤坂城跡）は、千早赤阪村のほぼ中央部北側、金剛山地から北方向へ延びてくる尾根上に位置し、西側には千早川が石川との合流を目指し、北上する。

城跡の北側には、二重の堀をめぐらせる建物跡を検出した楠公誕生地遺跡、「花屋敷」・「古屋敷」などの小字名が残り、建武中興以降楠木邸跡と伝えられる樹山遺跡が存在する。

また、城跡の周囲には、二河原辺城跡、猫路山城跡、枳形城跡、国見山城跡などの多くの山城跡がまさに城塞群として展開する。

このような環境下、すなわち、山城群の中核とも考えられる楠木城跡（上赤坂城跡）で採集された遺物について報告する。

### 3. 採集された遺物

採集された遺物は、1993年8月18日から1999年11月30日の間に採集されたもので、総点数は170点を数える。しかしながら、いずれも小破片であり、時期の特定、図化が困難なものが大半である。

城の北側から主郭、第2郭を目指して登りはじめると第2郭に到達するまでに、1の木戸から4の木戸という伝承の残る箇所を通過することになる。なお、3の木戸と4の木戸の間には、そろばん橋の伝承の残る箇所がある。

2の木戸とそろばん橋の間で、9点の遺物が採集されている。瓦質の播鉢の口縁部片（図13の5）は、形態から14世紀後半～15世紀中頃ぐらいのものであると考えられる。

第2郭では12点を数える遺物が採集されている。ここでは時期の特定できるものは見当たらないが、瓦器碗の口縁部片や鉄釘（図13の14）などが採集されている。

第2郭西側と茶碗原では、各々、42点、77点と最も多くの遺物が採集されている。茶碗原では、灯明皿として用いたと考えられる煤の付着のある土師器皿片（図13の1）などが採集されている。また、各々の地点で何らかの構造物の存在を想像させる壁土が採集されている。

第2郭南側でも礎土（写真1）が採集されている。

主郭西側では、瓦（図13の12・13）が採集されている。軒丸瓦は、諸特徴から14～15世紀代の年代を考えたい。

先にも記したように、採集遺物はいずれも小破片のため、詳細な時期の確定が不可能なものが大半であるが、概して14世紀代から近世までの遺物が見られた。

また、時期的な問題を無視すれば、茶碗原から東の地点では、主郭付近に比して、羽釜や播鉢などの煮炊具や調理具が多く採集されており、このような採集を継続させれば、発掘調査を行うまでの、城内における空間使用の推測を助けることにもなる。

同様の思考により、壁上の採集できる地点を縄張り図上にポイントしていくことにも大きな意味がある。

#### 4. おわりに

以上、楠木城跡（上赤坂城跡）で採集された遺物について報告した。

千田嘉博氏は、山城研究における代表的手段である縄張り調査を発掘調査の前段階の仮説的作業と位置付け、縄張り調査と測量・発掘調査は、互いに補完し合うものであるとした。（註1）表面採集された特徴的な遺物や一定量の遺物などから推測を行う作業もまた、千田氏の言う仮説的段階の重要な作業の1つであると言えるだろう。

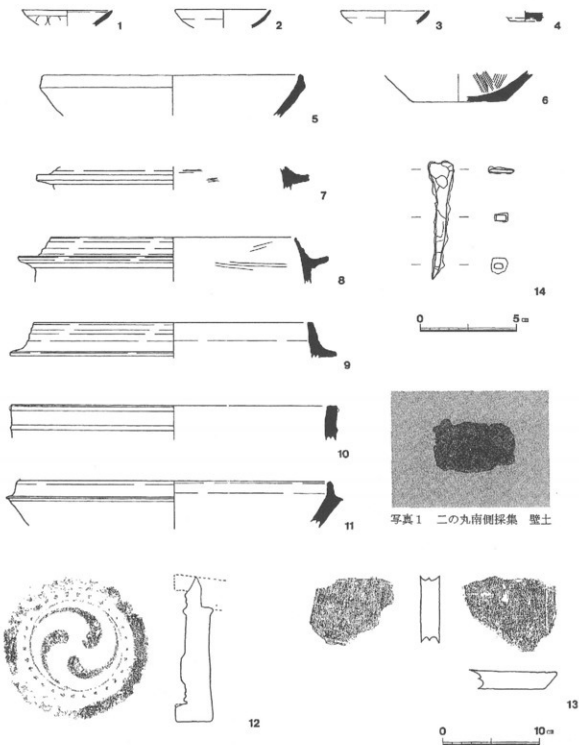
今後も情報量の増加を日論み、このような作業を継続させながら、千早赤阪村の山城へのアプローチを行っていきたい。

本稿は2000年に『摂河泉』第30号に掲載された「上赤坂城跡採集遺物」を再録したものである。

なお、文章の一部は加筆・修正を行った。

また、再録にあたり、紙面の都合上、採集地点を記した図を割愛した。参考に記せば、今回調査を行った主郭の北東方向に位置するピークが第2郭であり、茶碗原と呼ばれる箇所は両郭の間に位置する。（6頁第2図参照）

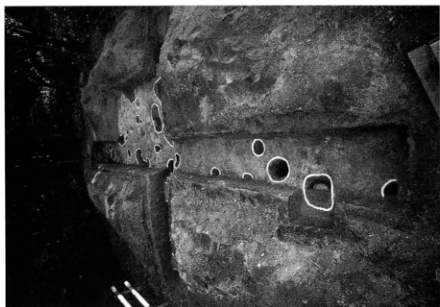
（註1）千田嘉博 1991 「中世城館縄張り調査の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集 国立歴史民俗博物館



第13図 採集遺物実測図

圖

版



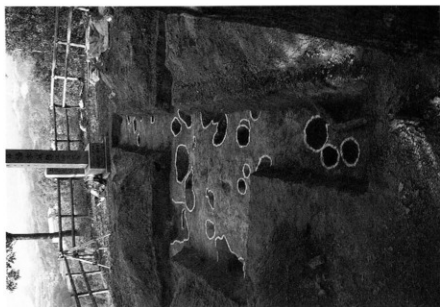
全景  
北から望む



西から望む



東から望む



南から望む



中央部



S P14





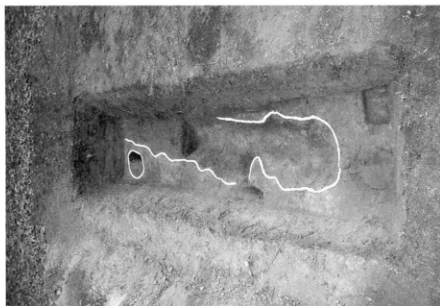
全景  
北から望む



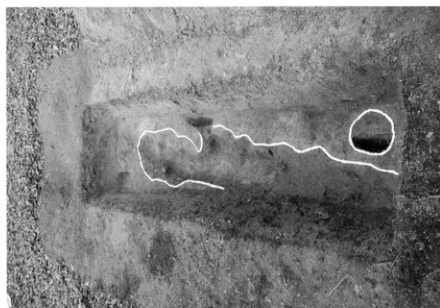
南から望む



遠景



全景  
北から望む



南から望む

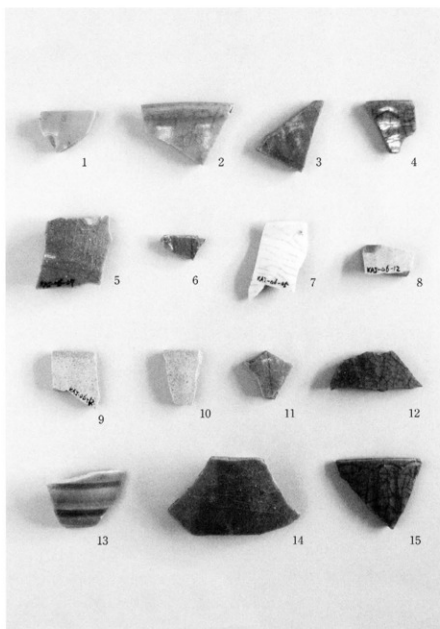


被熱痕跡

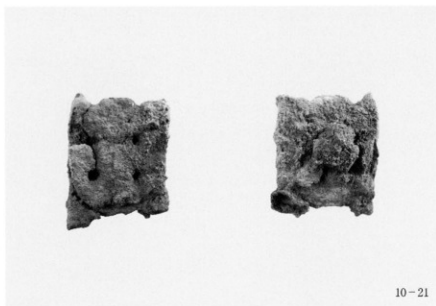
出土土器



貿易陶磁器



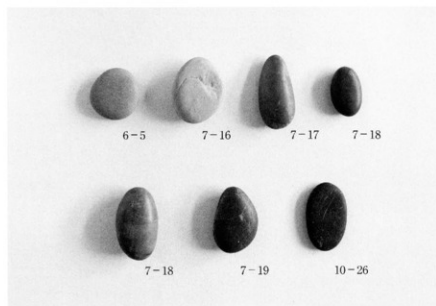
小札 (1/1)



壁土



碁石 (1/1)



遠景



主郭北側より  
北を望む



南を望む





茶碗原



算盤橋  
南を望む



北を望む

# 報 告 書 抄 録

ふりがな		くにしせき くすのきじょうあと						
書名		国史跡 楠木城跡						
副書名								
巻次数								
シリーズ名		千早赤阪村埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号		第5輯						
編集著者名		西山昌孝・和泉大樹						
編集機関		千早赤阪村教育委員会						
所在地		〒585-0041 大阪府南河内郡千早赤阪村大字水分 263 番地						
発行年月日		西暦 2008 年 3 月 31 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
楠木城跡 KAJ-05 06 07	大阪府 南河内郡 千早赤阪村 大字欄山・ 東阪	27383		34° 26' 54"	135° 37' 51"	2006.11.20 ～ 2007.1.31.	1,220 ㎡	史跡整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
楠木城跡 KAJ-05 06 07	山城	南北朝～戦国	建物 柱穴 溝		土師器 瓦質土器 常滑・瀬戸 鉄製品 銭貨 他		主郭の調査	

国史跡 楠木城跡

2008年3月31日

発行 千早赤阪村教育委員会  
千早赤阪村大字水分263番地  
0721-72-1300

印刷 (株)中島弘文堂印刷所



